

[ if I had a tail ]

新 × 登場人物

0、

徐々に照明がつく。

×が話をしている。

×「知ってる？はじめて個体に電気を通すときはね、いつも、息を止めて見つめてるんだよ。10秒数えて、その時間、問題なく電源が通ったら、ああ、この個体は大丈夫だって思える。問題がある場合はね、決まっただいたい8秒と9秒の間くらいに、電子音が一瞬飛んだみたくなるんだよ。1秒から7秒までは問題ないのに、決まって8秒と9秒の間に。それで毎回、次こそは大丈夫かも、私の見間違いかもって思って、またいちから10秒数えるの。それでもやっぱりダメなもんはだめなんだけどね。なんかいつも諦めきれなくて期待しちゃうんだ。

でね、もうだめなんだ、ってわかったときさ、いつも迷うの、自分でスイッチを切るべきなのかなって。今、自分の手で命を吹き込んだばかりなのに、自分がとどめを刺して、その子の首を落とすようなことを、しても良いのかなってさ。

まあ、わかってくれとは言わないけど、君が殺した一体のロボットの下には、1000体の屍が転がっているわけでき。でも、反対に君が、ありふれたロボットだと思っただその時にはさ、私にとっては、この世でたったひとつの大切な……。ねえ、聞いてる？」

#### 暗転

1、

×が椅子に座っている。

新が両手に紙袋を持って立っている。

×「サンタみたい」

新「え」

×「いや、違うか。サンタは紙袋なんかじゃなくて、大黒天みたいな大きな布袋よね」

新「サンタ：？なんででしょうか、それは」

×「（手を振って笑いながら）良い良い、忘れて」

新「あの、よろしいでしょうか」

×「はいどうぞ」

新、持っていた紙袋を慎重に床に置く。  
新、慣れない様子でお辞儀をする。

新「あ、あの、この度はお引き合いましたき  
…」

×「ああ、大丈夫よそんな肩肘はらずに」

新「すみません、お客さんのご自宅までくる  
のが、今回が初めてで…」

×「そういう部署、ほかにちゃんとあるものね」

新「ああ、はいそうなんです」

×「でもほら、こういうのはちゃんと専門的なことが分かるひとから買いたいじゃない」

新「こういうのは？」

×「え？」

新「ああ、いえ」

×「ごめんね、外商部のひとになんか言われちゃったりする？」

新「いや、そんなことは」

×「だいじょぶ？」

新「はい、こちらのお宅は一切外商部を通さないということはない」

×「ああ、もうそういうお客だって認識されてるわけね」

新「そうですね」

×「ごめんねー、わがままいって」

新「いえ…」

×「じゃあ、早速品物を見せてもらおうかな」

新「はい」

新、紙袋の中から、雛人形を取り出し、机の上に置く。

新「この現代では、ほとんど飾るひとはいませんが、少し前までは、小さい女の子がいる家には立春、2月ですね、その頃になると家に飾ると縁起が良いとされまして…」

×「知ってる」

新「あ、そうですね。失礼しました」

×「子供の健やかな成長を祈って飾るんですよ。良いわよね。一周回って、こういう神頼みみたいなことってロマンを感じちゃう。どう、そう思わない」

新「あー、えっと、そうですね」

×「君、子供は？」

新「いえ」

×「兄弟は？」

新「いえ、僕は兄弟はいなくて」

※「…そう」

新「（周りを見渡しながら）こちら、どなたか大切な方への贈り物ですか」

※「大切な…？そうねえ。たくさんいる。ここにはいないけど」

新「え？」

※「次、オンラインで見たもうひとつの品は？」

新「あ、はい」

新、おっかなびっくりもうひとつの紙

袋から焼け爛れた人形を取り出す。

※「はは、そんな怖そうにしないでよ」

新「そうですね、すいません。えっとこちらは初期型の犯罪思考検証用の開発・利用された個体です」

※「…」

新「プログラムの中に犯罪者の脳をベースにした人工知能をインストールし、犯罪心理



解明のために開発された個体です。具体的に言いますと、生活環境、その他諸々の環境要因がどのように犯罪者に影響を及ぼすか等を繰り返し検証可能にした、犯罪予防・更生に大きく貢献するプログラムのプロトタイプモデルです」

※「結構小さいわね」

新「はい、何しろほんとに初期の初期で、理論を具現化した試作品に近いもので」

※「まあ、でもチャッキーみたいなもんか」

新「はい？」

※「見てないの?!」「チャイルドプレイ」

新「…」

※「信じらんない！社会人として教養が足りないんじゃないの?!ま、いいわ。少し前のエーガよ、エーガ」

新、人形をおっかなびっくり見つめて  
いる。

× 「ダメ？ こういうの」

新 「ああ、はい、だめですね」

× 「どうして？」

新 「禍々しいものを感じて」

× 「禍々しいもの（笑う）」

新 「やっぱり普通の骨董とは違いますね」

× 「ふうん」

新 「すみません」

× 「いや、良いのよ」

新 「……」

× 「こういうのは、自分が気に入るかどうかわからないよ」

新 「はい、もちろんです」

× 「たとえば、悪いことしたとしても」

新 「はい」

× 「倫理観が吹き飛んじゃうのが愛、ってやつじゃない」

新 「倫理観が吹き飛ぶ……」

間

×「ねえ」

新「はい？」

×「先月の30日って」

新「先月の30日？9月30日ですか」

×「そう」

新「9月30日がどうかしましたか」

×「9月30日って何してた？」

新「えっ」

×「その日、私の誕生日だったの、今ふと思  
い出して」

新「そう、なんですね」

×「何してた？」

新「えっえっ」

×「単なる興味よ」

新「えっ…」

×「…」

新「なに、してたかな…」

×、新のこを見つめている。

新「あ」

×「？」

新「みんなで旅行に」

×「みんなって、家族で？」

新「いえ、職場の同僚と」

×「職場の？」

新「はい、創業記念かなんかで。9月30日

なんて期末なのに、なんで営業しないんだ、

ってみんな不思議に思ってた…」

×「みんなまで？」

新「はい」

×「同僚みんなまで？」

新「はい、うちの店舗だけじゃなくて、デパ

ート全体なんで、ほんとに全員ですね」

×「…」

新「なにか…」

×「みんないじられてるじゃない」

新「え？」

※ 「なんでもない」

新 「これまで、会社が社員を旅行に連れてつてくれるなんてことなかったんで、びっくりしましたよ。うちの妹も、お土産買ってきてくれてめちやくちやにはしゃいで」

※ 、にやりと笑う。

※ 「そう」

※ 、焼け爛れた人形をゆっくり見て

※ 「この個体も、失敗したのかしらね」

新 「え？」

※ 「こないだ、ニュースになってたじゃない。犯罪検証用個体が、実験に失敗して処分されたって」

新 「そうでしたっけ」

※ 「本来、人間に危害を加えてはならないのに、人間が死んだから」

新「え？」

×「まあ、事故だけどね。事故じゃなきゃ、  
そもそも人間を殺せるわけないもん」

新「それで、処分？」

×「そう」

新「…」

×「こないだ起きた誘拐と放火が起きた事件  
では、実験自体は成功したのに、親族の報  
復でその個体がダメになったとか」

新「親族？」

×「誘拐だけでも重罪なのに重ねて放火だな  
んてね。その個体は、ずいぶん特殊な動き  
をしたもんだわ…」

新「…」

×「君はさ」

新「はい」

×「大切なものを失ったことはある？」

新「はい」

×「大切なものを、奪われたことはある？」

新「いいえ」

×「…」

新「お客様は、あるんですか。大切なものを奪われたことが」

×「あるよ。復旧しようとしたけど、ダメだった」

新「復旧？」

×「ところで、妹さんってさ」

新「え？」

×「妹さん」

新「いや、僕は一人っ子なんで妹とかは…」

×「ああ、そう」

×、新のことをゆっくり見つめ返す。

×「（新の様子を見ながら探るように）えっと、旅行ね。旅行は？行ったんだよね？」

新「え？」

×「9月30日、期末で、なんでかよくわからないタイミングで、みんなで旅行行ったんですよ」

新「はい、そうなんです。なんで知って」

×「で、どこ行ったの。国内？海外？」

新「えっと…どこだったかな」

×「じゃあ、一番覚えてるのは？」

新「観覧車」

×「…へえ」

新「小さな。だって、ビルの屋上にあるやつ  
なんです。遊園地にあるようなおっきいや  
つじゃない」

×「それで？」

新「食べ物は色々売っていたけど、妹は何も  
食べたいと言わなくて。だって、その下の  
食堂で、お子様ライスを食べたばかりだ  
ったんです。お子様ライスだけじゃなくて、  
メロンソーダも」

×「…」

新「毛むくじゃらで、汚いあのパンダの乗り  
物に乗りたいたとせがんで。小銭を持たせた  
ら、走りだして」

×「旅行でしょ？」



新「え？」

×「同僚のひとと、同僚のみーんなで、メロ  
ンソーダ飲んで、小銭で動くパンダに乗っ  
たんだ？」

新「りょこう：」

×「ずいぶん古い時代設定じゃないの。混線  
してるの？」

新「いや、ちがう」

×「何が違うの？」

新「旅行には行っただです」

×「それで？」

新「みんなで川辺で花火を」

×「花火って花火？」

新「花火です」

×「電子のタイプじゃなくて？ほんとに火使  
うやつ？」

新「はい」

×「めずらしー。まだ売ってたんだ？」

新「売ってますよ。今、作ってるのは、国内  
で1社だけですけど：」

※ 「それで、花火がどうしたの」

新 「いや、なんか不良品だったぽくて」

※ 「不良品だった？」

新 「火をつけたら、結構大きめに爆発して」

※ 「え？大事故じゃない」

新 「ああ、まあ、ロケット花火みたいなかんじで、着火してたのは僕だったんで」

※ 「…」

新 「ほかのみんなは遠くから見てるだけだったんで火傷とかはなかったんですけど」

※ 「…」

新 「…」

※ 「きみは」

新 「僕は、すこし足元のほうに、やけどを。」

2人、体調不良で旅行に参加しなかった同僚がいたんですけど。同僚に、「行かなくてよかった」なんて軽口を叩かれて」

※ 「やけどしたの」

新 「え」

※ 「たしか？」

新「え、あ、はい（傷を見せようとする）」

×「見せなくて良いよ」

新「え」

×「君はあるはずのない旅行で、やってもない花火で、やけどしたんだね？」

新「え、いや、うそなんかじゃ」

×「…みつけた」

新「え？」

急な暗転。

新「え、電気が」

×、手元の業務用ライトの灯りをつける。

新「マドカ？マドカ？」

×「…」

新「もう大丈夫だよ」

×「…」

新「マドカ、マドカ、どこにいるんだ」

明転。

新、呼吸が荒い。

新「僕には妹が…？いたじゃないか。そうだ。

どうして忘れてたんだろう…」

新、突然どこかに行こうとする。

×「待って。どこに行くの」

新「思い出したんです、行かなきゃ」

×「どこに」

新「殺さなきゃ」

×「誰を」

新「…」

新、振り切っ払いこうとする。

×、新を引き止めようとする。

新「離してください。僕は思い出したんです」

×「：だから。何を」

新「火事の火が消えて。電気もなにもありませんでした。でも僕は妹を助けたくて」

×「助けに？」

新「妹が誘拐されて、それで」

×「君は一人っ子でしょ」

新「いや、だから忘れてて」

×「忘れてたんだ？妹を？」

新「僕にもよくわからないです、どうしてそんなことが、起きたのか」

×「ずいぶん都合のいい脳みそだね」

新「もう、行かせてください」

×「どこまで思い出したの」

新「えっと、だから、誘拐されて……」

×「それで？」

新「殺されて」

×「……」

新「だから、復讐しなきゃ」

×「犯人は？」

新「つかまってるません」

×「どうして」

新「分かるでしょう、法律で裁けない存在な  
んですよ。だから僕が復讐をしなきゃ」

×「まだ、復讐はできてないの」

新「そうです。だから一刻も早く」

×「君はどういう感情、今」

新「憎い」

間

×「……」

新「？」

×「じゃあなんのために壊したのよ」

新「え？」

×「せめて清々したって言ってよ、なんのた  
めに私が悲しんでんのよ！全部全部無意味  
になるじゃないの。私だけが悲しんで」

新「何言ってるんですか」

×「……全然思いつかないじゃん」

新「え？」

×「ぜんぜん思い出せてない」

新「どういう？」

×「まだ思い出してないことあるでしょう？」

新「？」

×「このライトは、まさしく、事件が起きた  
時君が持ってたもの、そのものだよ」

新「え……」

×「君にはちゃんと、思い出してほしいくてね  
(新にライトを握らせる)」

新「……」

×「そのライト凹んでるでしょ」

新「……？」

×「ほらここ」

新「……たしかに凹んでますけど」

×、新の様子を見ている。

新「……」

×「……どうして思い出してくれないの」

新「え？」

×「君はもう、復讐を果たしたじゃないの」

新「……」

×「君は、君の妹の誘拐犯を、その場で、このライトで……」

新「……」

×「知ってる？電気が通らなくなると、目が全然ね、遠く見えるの。それを見てはじめて、さっきまではちゃんと意識があったんだなって気づくんだよ」

新「…僕が殺した？」

×「そう。壊したし殺した」

新「いやまさか」

×「そんなバナバナ？！記憶がないから？」

新「…そうです」

×「妹はいないと勘違いしていた君がそんなこと言うんだ？自分の記憶を信じてるの？」

新「はい……」

×「君の火傷は花火のせいなんかじゃないよ。放火によって、みんなは避難した。でも君



は現場に戻った。だから火傷したの。やけどじゃないよ、足が溶けたんだ」

新「…」

×「もっと言ったげようか？二人が旅行に来なかったって？それは、その二人が人間だからだよ。人間は犯罪実験に巻き込むわけにいかないからね！」

新「…」

×「君さ、怪我をしたことはある？転んで血を流したことは？傷口が痛くて、それでも泣きながら、泥を水道水で洗い流したこと  
は？」

新「…」

×「妹はいないと言って。どうしてそんな思い違いしてたのか不思議にならない？」

新「それはどういう」

×「どう考えても、記憶をいじられてるじゃない」

新「…」

※「(苛ついて)記憶を再設定されたんじゃないの」

新「再設定って……」

※「まあ、そうよね。人間相手なら無理だよ  
ね」

新「え。どういうことですか」

※「消去法でも使ってみたら。人間じゃない  
ならなんなんだろうね」

新「そ、そんな」

※「記憶を都合よく切って貼って」

新「僕は人間……」

※「どうしてそう思うの？」

新「だって、僕は、物心ついたときの記憶だ  
ってあるし、小学校だって、中学だって」

※「だから、記憶はあてにならないんだよ！  
妹のこと、忘れてたくせに！」

新「……」

※「ねえ。ロボット法を思い出してみなよ」

新「人間に危害を加えてはならない」

×「どうして、あの子は、君の妹を殺すことができたのかな？」

新「…」

×「君の妹は、ほんとうに人間なのかな？」

新「…」

×「君の妹が、人間じゃないとしたら。君もまた、人間じゃないのかもね？」

新「…」

×「？」

新「あなたは僕を見つけ出して。これからどうするんですか」

×「たぶん君と同じことをするよ」

×、新からライトを取り返して強く握る。

新「…」

×「人間は機械に似てるよね」

新「機械が人間に似てるんです」

×「…」

新「僕が感じた時のあの気持ちを、今、あなたも同じように感じているなら」

×「…」

新「ぼくとあなたの違いって、なんなんですよ。か」

×「さあ」

新「あなたも僕と一緒にですよ」

×「似てる」というのと、「一緒」というのは違うんだよ。天と地ほども違う」

新「血を流した記憶があるから？」

×「…」

新「傷口から泥を洗い流したから？」

×「…」

新「そんなのは、痛覚と視覚、ただの情報ですよ。それが、よそから移植されたものなんかじゃなく、自分自身の痛みだって、どうして言い切れるんです？」

×「…」

暗転。

明転。

新、倒れている。

×、新の近くにしゃがみこんで話し始める。

×「知ってる？はじめて個体に電気を通すときはね、いつも、息を止めて見つめてるんだよ。10秒数えて、その時間、問題なく電源が通ったら、ああ、この個体は大丈夫だって思える。問題がある場合はね、決まっていたいたい8秒と9秒の間くらいに、電子音が一瞬飛んだみたくなるんだよ。1秒から7秒までは問題ないのに、決まって8秒と9秒の間に。それで毎回、次こそは大丈夫かも、私の見間違いかもって思って、またいちから10秒数えるの。それでもやっぱりダメなもんはだめなんだけどね。なんかいつも諦めきれなくて期待しちゃうんだ。

でね、もうだめなんだ、ってわかったときさ、いつも迷うの、自分でスイッチを切るべきなのかなって。今、自分の手で命を吹き込んだばかりなのに、自分がとどめを刺して、その子の首を落とすようなことを、しても良いのかなってさ。

まあ、わかってくれとは言わないけど、君が殺した一体のロボットの下には、1000体の屍が転がっているわけでき。でも、反対に君が、ありふれたロボットだと思っただその時にはさ、私にとっては、この世でたったひとつの大切な……。ねえ、聞いている？」

×、新に向かって静かに話しかける中、急に電池が切れたかのように倒れる。

おわり